

資料室だより 39

J.S.Bach: Magnificat, Es dur BWV243a (Bärenreiter) MC1/B118/#243a

ラテン語によるマリア賛歌でルターが許したのは唯一マニフィカートでした。聖書に基づいているからです。バッハのマニフィカートといえば多くの方々が D dur のマニフィカートを思い浮かべるのではないのでしょうか。この Es dur のマニフィカートはシュミダーのバッハ作品目録では Erste-Fassung、つまり第一稿とし、あとの年代になるマニフィカートを第二稿、つまり最終稿のように扱っています。旧シュミダーは Es dur のマニフィカートの存在すらなく D dur のヴァリエーションといった扱いになっています。このようにシュミダーは最終稿に BWV 番号を付けるという作品概念をもっていますが、バッハ作品目録のもう一つの権威であるバッハ・コンペンディウムでは、バッハがかかわった作品（演奏されたという点）に番号が付きすから 2 曲のマニフィカートは単に調性を変えただけでなく別個の作品として扱われています。

結論から言いますと D dur はマリアご訪問の祝日のための曲、Es durの方はクリスマスに演奏するためのものでした。D dur のマニフィカートは作曲推定年代が 1732-35 とされています。ザクセン宮廷作曲家の称号を得るためにカトリック教会への献呈を意識して書かれた作品ではないかという説もあります。Es dur から D dur への移調もドレスデンのティンパニの調弦の関係もあります。Es dur のマニフィカートは 1723 年 12 月 25 日に初演されており、オリジナルのテキストの間にドイツ語による Vom Himmel hoch、すなわちクリスマスのコラールが挿入されているので明らかに D dur とは別用途の別の曲と考えてよいでしょう。

(杉本ゆり 記)